

---

# ワールドエンドによろしく！

嘘月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ワールドエンドによるしぐく！

### 【著者名】

ZZワード

ZZワード

### 【作者名】

嘘月

### 【あらすじ】

誰よりも理想主義者な偽現実主義者 彩瀬 あやせ 翔生 かなる ある日、彼は一人の夢げな少女と出会う。World End 彼女はそう名乗つた。翔生を中心に狂いだす世界。何気ない日常を世界の終わりから守る日々が始まる。

## word end (前書き)

初投稿をせてもらっています。至らぬ点だけでしょうが、生ぬるい田で見ていただけたらと思います。ご意見は真摯に受け止めたいと思っていますので、何か頂けたらと思っています。よろしくお願ひします。

風が吹いた。

少女の髪は流されて、形が無くなる。

酷く醜く人で混雜した交差点を滑らかに、流れるかのように避けながら。

誰かに触れる事なく踊るよう、「」、誰かを恐れるかのように慎重に。誰よりも世界を愛した少女が天を仰ぐ。

誰かが呟いた。

「世界が終わる」

そう呟いた気がした。

起立と礼を終えて放課後の教室を誰よりも早く出る。

季節は春から夏へ切り替わり、ようやく夏らしくなつてきた7月。汗ばんだ肌にYシャツという組み合わせは最高に気持ち悪い。

「じゃあな彩瀬<sup>あやせ</sup>」

「おう、またな」

高校2年生のこの時期は世間が騒がしくて嫌気が差す。

部活のインターハイ? 夏に向けて彼女ができました? 国立大学を目指して受験勉強?

クソくらえ

インターハイ行つてもプロになるのは一握りだ。社会の役に立つ? 人並みに生きていたら人並みに挨拶も礼儀もできる。

彼女ができた？好きな人ができた？一時の感情に身を委ねて、感情の逃げ場を作つてただけに過ぎない。結婚前提か？結婚したら本当に幸せになれるのか？

レベルの高い大学に行つて満足か？そこでのお前は輝いているのか？くだらない能書きにしか頼れないガリ勉野郎か？

もつと現実を見る、何が効率的か何が利益になるか考えていけ。

……と言つても、主観的にも客観的にも一番損してゐるのはやっぱり俺だった。

友達を作るのは苦手ではない。年上と話すのも苦手ではない。世間と関わるのも苦じやない。理想を追い求めるのは誰よりも好きだつた。

俺 彩瀬翔生は、誰よりも理想を追い求めていたに違いない。バスケットボール部に入り、持ち前の運動神経と身長を活かし、チームのエースという座を手にした。

県のチームでは俺を知らない選手なんていなかつた。だからこそ、特待生としてこの高校に推薦で入学する事が出来た。この先俺は何処までも理想を追い求める、そんな事まで実感していたんだ。

そんな毎日に生き甲斐を感じていた矢先に、バスケットを始めるきっかけをくれた先輩が交通事故で手首を無くした。

彼のシートフォームはまるで理想そのものだつた。

そんな先輩が格好良くて、俺はバスケを始めた。

理想を求めて、何かに打ち込む日々が終わる音。

俺はバスケットなんか好きじやない事に気づいた。

俺が好きなのは理想を追い求める自分。

理想が朽ち果てた時、その理想を越えたような空虚が襲つた。何か一つを努力なしで終わらせてしまつたような、至極極まりない背徳感。

俺なんかよりもずっと素晴らしい選手で、俺なんかよりずっと将来性のあつた先輩、そんな先輩の両手首から先が空と交わっていた。

沈黙の続く病室の中でこう言われた。

「お前は俺のバスケをしてくれ、お前は俺だ。最後の希望つて奴のかもしれないな」

その言葉の重みに耐え切れなくなつた俺は、逃げるかのようにバスケ部をやめた。

わかつっていた。先輩の求める理想を追いかけるべきだと。それが先輩への恩返しでもあって、先輩が望む理想だと。理想は何よりもリアルである。

何かを手に入れようとすれば何かを失い、ときには手に入れようとしたものさえ消えてなくなる。

先が見えているなら、最初からしなければ良かつた。

理想を失つた俺には何も無かつた。  
きっとそのまま続けるという選択肢もあつたに違いない。  
それをしなかつたのは何故だろうか。  
考えたくもなかつた。

高校1年生の冬に、俺は世界とやらを憎んだ。

それがこの捻くれた性格の理由。

これからもきっと、自分の首を絞め続けるだけの思い出になるだけなのだろう。

「なーに辛氣臭い顔してんだ！」

「！？……後ろから押すなよ、倒れるとこだつたぞ」

「ははは、わりいわりい。どうよお茶でもしないか？我が親友」

「いや、いい」

「そんな気分じゃねえか……じゃあうち来いよ、お気に入りの格闘技見せてやるよ！まじすげえんだぜ！」

「こいつ、井上隆二<sup>いのうべきりゅうじ</sup>」は中学校からの友人で今も同じクラスの腐れ縁だ。俺がバスケ部をやめてから心配して余計に絡んでくるようになつたわけで、親友なんて大それたものではない。

井上は街の不良5人に絡まれても無傷だつた、なんて噂もあり学校ではちよつとした有名人だ。

「お前と格闘技を見たら、俺がお前の技の餌食になるよな？いつもお前もかかつてこいよ！その方が盛り上がるだろ！」

「痛いのは嫌いだ。特に脳筋のお前となんて断固拒否する」

「それは残念だ、勉強のし過ぎは体に味噌だぞ？」

「……それを言うなら身体に毒な」

「あ、あー変わらないだろどつちでも」

「毒と味噌が変わらないなら日本人は妖怪か新人類なんだが。

「ま、いいや！もう少し楽しく生きよつぜ翔生」

「十分充実しているけど？」

「俺の目は誤魔化せねえよ。お前はもつと刺激を求めてる。違うか？」

「……お前の目も腐つたもんだな、刺激なんてリスクと同義語だ。

自分のリスクになる事なんて望んでいないさ。帰り際に理科実験室で防腐剤でも貰つて来い。ちゃんと注意事項読んで使えよ

「あ、あれえ？そこはもつとこつ……流石俺の親友、やっぱなんでもお見通しだな！的な流れだつたるお

「他人から出直して来い」

「そこからー？」

「……ありがとな」

「んー……そつか、また鑑賞会に誘つわ。じゃあな」  
また誘われるのか……そう思いながらもしつかりと馬鹿な友達と別れる。

下校途中の生徒の群れに混じり、何の捻りも無い背景へと身を委ねた。

刺激の強い楽しい人生……か。

そんな人生はたしかに魅力的だ。

ただ、それは成功例としてであつて、必ずしも、そのリスク、つまり犠牲を支払つて絶対に手に入れられる対価ではない。

そんなものには魅力がない。自分が頑張った分だけ落胆するならば、そんなものはただの悲劇でしかない。

酷く捻くれた性格にもそろそろ自己嫌悪し飽きていた。

何か世界を狂わすきっかけもあるハズもなく。

世界を変えたいだなんて妄言に誰も耳を傾けてくれない。

どこまでいっても、結局俺は理想に憧れ続けているだけだった。

いつも通りに騒がしい街の表通りへと差し掛かる。

下を向いて歩くサラリーマン、笑いながら帰る学生、こうして冷静に見るといつもあるのは現実。

裕福な国だ、平和な国だなんて世界で言われているが、結局それは隣の芝生って奴であつて……何が起こつてもきっとこの世界は変わらない。

そう、きっと……何も変わりはしないんだ。

「え？」

本物の風景の中に、今何かが“存在”した

たしかに、今非現実的な存在があつた気がした。

ここだと言わんばかりに主張するかのような違和感。真っ白い髪を靡かせて、踊るように人ごみを掻き分けていく。

そんな異質な存在に、誰一人目を向けなかつた。

何かに惹かれて、ただその白い軌跡を追うことにした、まだ暑い猛暑を奮う7月の良く晴れた日。

「私の事、見えるんだね」

俺は世界とやりとりで圧倒つた。

## 廻り始めた世界

「私の事見えるんだねって……はは、どうこう意味だよ  
額から変な汗が出た。

周りの風景は、ただ日常を映して流れしていく。  
何も変わらないハズだ  
現に何も変わっていない。

それなのに身体が震える。まるで白昼にお化けでも見たような。  
そう……お化け？

「そのまんまの意味だよ、私を見る人は私を救ってくれる人。そ  
うでしょ？」

通行人が俺達を腫れ物でも見るような目で見る。  
いや、正確には”俺”だけを見ている。

目の前の少女……と言つても同じ位な年の訳だが、絶世の美女と言  
つても過言ではないこの子の方が人目を引くハズなのだが。  
どういう訳か、通行人は俺だけを、見ては見ぬ振りして遠ざかって  
いく。

「なんなんだ……？」

まるで他の人には彼女は存在していないように、この女の子は明らかに現実離れしていた。

「初めてまして、世界の救世主さん？私は世界、ワールドエンドと言  
います。これからよろしくね？」

電波だ、完全に現実を見失っている。この子はどこか頭が可笑しい  
子なんだ、可哀想に。

「面白い遊びをしているね。でも俺は暇じゃないからまた今度  
え、ええ！？あ！そつか……えつと……人間にはハルマグドンつ  
て言った方が早いのかな？あれ？あれれ？」

「……」

「ひどいっ！…商品裏のバー」「コードでも眺めるかのような眼差し！」

じつやうじ世界とやうは俗物に染まつきてこぬひここの調子じやうが世界は安泰だ。

早める足に必死に謎の少女は付いて来る。

「信じてください！たしかに今までの危機を救つてくれた方も、最刃は似つかう。必ず必ずをしていまし。」ジナジのまわりです

俺の他に何人に声を掛けているんだこいつ。

あ、あの！聞いてます？無視ですか！？あれ？見えてない？おーい！ここですよー！

そう言ひて田の前で両手を広げて振り回していく。

「あの……本当に迷惑だからやめてくれよ。君といふと目立つて仕方ない。同じ学校の人には会つて変な噂が立つのも嫌なんだ」

「大丈夫です。私を見えている人は貴方だけですよ？彩瀬翔生さん」  
「いい病院を紹介しよ……なんで俺の名前知ってるんだ？」  
得意げに目の前の少女は胸を張つて答えた。

「彩瀬翔生、17歳。私立 小波学園2年生、文武両道、バスケツ  
トボールが仕事の現実主義者」

え  
？

「小学4年生の頃に両親が海外へ、それ以来一人暮らし。  
寮制の14歳、趣味は暴力」

おいおい。

「世界を変えたいと願う貴方の救済を、私はワールドエンドは承諾します。」

何者だ？この女、俺のことは兎も角、妹の事を知つて居るのは、いく  
一部のハズ。

「私はワールドエンド、世界の終焉。人は私を神と呼び、宇宙と呼

び、空氣と呼び、歴史と呼び

少女が白く輝きだす。

その異様な姿にも、歩み往く人々の視線は止まらない。

「世界と呼びます。さあ、手を」

白く伸びた腕が、俺に向かつて差し出される。握つてしまいたくなる美しさに惑わされ……。

手を伸ばそうとした刹那、その手は宙を握つた。

「え？」

「え？」

少女は、得体の知れない黒い塊に飲み込まれていった。

「あ、れ？」

たしかに存在したハズだ。

一瞬の事で頭が状況に付いていけていない。

「あ、あの！今ここにいた女の子何処に行きましたか！？」  
気が動転してか、近くにいた通行人に俺は尋ねていた。今、目の前で起きた出来事は、とてもじやないが信じ難い。すると、通行人の男は変なものでも見るかのように答えた。

「君さつきから一人で何喋つてるんだ？」

……つ！？

「な、何言つてんですか……今いたでしょ？一緒に俺と話してい

た……白い髪の……綺麗な女の子が……」

白い髪の？綺麗な女の子？

果たしてそんな現実離れした女の子が、存在したのだろうか？

男は首を傾げて、これ以上は時間の無駄と察したのか、何も言わず

に去つて行つた。

日常が崩れしていく予感がした。

間違いなくイレギュラー。

日常を狂わすだけの出来事を確信した。

それでも。

『これが夢なら』と、そう願えなかつた。

「ほんとに……なんだつたんだろうあの子」

『現在、樽宮市で起きている連續窃盜事件ですが、未だ犯人の消息は掴めていな模様です。警察によりますと、この事件には大規模な窃盜グループの関与が背景にあると見てているようです』

街中のスクーンが映し出すのは、毎度の『とく同じよつ』ニュース。

女の子、黒い塊、世界の救済

考えれば考えるほど真実味がなく、本当に白昼夢だったのかもしない。

何とも言い換えない違和感だけを胸に、ただ帰宅する他なく、  
彩瀬翔生の一日は終わりを告げてしまつ。

二つの影があった。

一人はフードを被つた若い男。

そしてもう一人は、白色に靡く腰まであるストレートヘアの美少女。男は少女を大切に扱っていた。

五体満足、拘束もなく、机の上にはたくさんのお菓子と紅茶、部屋は歪に急いで取り繕つたような、一面のピンク。

呑気に紅茶を飲む少女と若い男を見て、誰がこれを誘拐と思つだろうか。

「ワールドエンドさん、そう氣を悪くしないでおくれ」

フードを被つた男はひたすら頭を下げる。

「いきなりこんな事をして本当にすまないと思つているよ」

「折角彼に信じてもらえそうだったのに……とんだ邪魔者だよ……」

「僕もこんな場所で”世界の終わり”と出会えるなんて思つてもいなくてね。少し強引でも、こうして話してみたかったんだよ。後悔はしてない」

少女は退屈そうに机の上のお菓子を転がして遊ぶ。

「初対面的人にする挨拶じゃないですね」

「どうも手癖が悪くてね……欲しいと願つたものはなんでも手に入れたいと思つてしまふんだよ」

部屋の隅に飾つてあるのは、どれもこれも高額な品ばかりだった。

「……あなたも能力者なの？」

「まあ、結構上手に使えるよになつたんだよ、ホラ」

そつ言つて何もない場所から黒い塊を出現させて、更に大量のお菓子を出して見せた。

「空間転移系ね、移動する物体の質量制限は飛び抜けてそうだけど

残念ね、貴方に用はないです

無関心とソッポを向ける少女にも、男は気にしていないようだ。

「それで私に何の用ですか？」

「あ、ああ！ そうだ！ そุดとも！」

男は初めて興奮したかのように、初めて感情を手に入れたかのよう

に、目を見開いて話し出した。

「ワールドエンドなんて存在、僕は実際信じちゃいなかつた！ そんな話を聞いた時から疑つていたさ！ だけど違う！ 実際こうして目の前にしてみると信じみたくなる。君は一体なんなんだい？」

「私の事を誰から聞いたの？」

少女の顔からは、徐々に余裕が消えていた。

自分を知つている事への恐怖が抑えれないようだつた。

「そんな事些細な事さ！ 僕は君を知りたい、なんで君がワールドエンドなんて呼ばれているのか？ 何故あの男が君を探していったのかを！ 知りたい！ 欲しい！ あの男が欲しがる君が欲しい！！」

男はこれまでにもなく喜び喘ぐ。

少女は窓の外を眺めた。

どうやら近くに遊園地があるようだ、ゆっくりと回り続ける観覧車を見ながら。

「…………私は…………」

少女は。

「なんだ今…………？」

頭が痛い。

無理矢理よくわからない映像を見せられたような感覚だつた。

時刻は深夜2時、横になつてから30分も経つていない。

帰り道での出来事もあり、余計に疲れているのだろうか。

……帰り道？

夢と呼んでいいのかも怪しい夢を思い出す。

白い髪の少女がいた。

ワールドエンド、そう男は言っていた。

急に嫌な予感がした。

でも、何処にいるんだ？

少女の視界、映つたのは観覧車、街のシンボルになつていて24時間回り続ける観覧車だった。

あの続きを、少女は何と言うのだろうか。

言ひようのない確信を胸に、翔生は家を飛び出す。

目的の場所、樽宮遊園地へ着く。

夢で見た角度を頭の中でトレースする。

近場で、高くない建物、カーテンがなく、部屋の明かりは点いていて、とんでもなくメルヘン一色の……部屋。

「……本当にあつた」

3階建ての建物の窓は一つだけ、薄いピンク光が灯る部屋だった。

階段を駆け上がり、インターほんを押す。

すぐに男の声がした。

「はい？」

こんな夜遅くにインターほんを押されて警戒している声。

「す、すみません！ ちょっとといいですか？」

咄嗟に上手い言い訳も出来るはずもなく、曖昧な訪ね方をしてしまつた。

ここで扉を開けてもらえなかつたらそれまでとこ。」

「ちょっと待つてください。今開けます」

「は、はい！」

すぐに扉が開く。

フードを被つた男が現れた。

「…？お前！」

勢いよく扉を閉めようとすると想定してた範囲だ。  
素早く足を扉に挟めて、閉めれないようにする。

「ちょっと中に入らせてもらいますよ…」

無理矢理に扉を抉り開ける、腕力では勝つて思つてた  
より簡単に中に入ることが出来た。

男を押しのけ、リビングへと向かうと、そこには。

「あ、あなたは！やつぱり来てくれたんだね」

そこには、優雅に紅茶を飲む数時間前に出会つた少女がいた。

「よくわからないけど、あれ見せたの君なんだろ？」

「うん、私が見せました。信じて来てくれるかは半分半分だったんだけどね」

と悪戯に舌を出してウインクされる。

…………可愛いじゃねえか。

「どうして？」

「助けて欲しいと思つたから」

「知り合いじゃないのか？」

「全然、全く、これっぽっちも赤の他人」

赤の他人に、どうしたらこんな所に連れて来られるんだよ。

「とりあえず、此処から出るぞ」

「あ、うん」

少女は名残惜しそうに、ティーカップを机に置き、机の上のお菓子  
をワンピースのポケットの中へと仕舞つた。

「えへへ」

微笑んでる場合か。

「おいおい、勝手に人の家上がりこんできて大切な客を横取りなん  
て勘弁してくれよ……」

夢で見たフードの男は、どうやら冷静さを取り戻しているようだつ  
た。

「詳しい事情は知らねえけど、こいつは俺の客だったハズだろ」

「つるさいな……」これだからガキは嫌いだ  
男の前に50㌢程の黒い塊が出現した。  
あまりにも現実離れした異質のものだった。

「なんだそれ……？」

「ん？ああ、知ってる。知ってるぞ。その顔」  
愉快なものを見つけたように、男は笑う。

「Chainと出逢うのは初めてかな？少年」

「Chain？」

「世界を繋ぐ者、異能を持つ者はそう呼ばれているそうだ。……た  
しかに怖い。僕だって他のChainと出会えば怖くなるさ。恥ず  
かしがることはない、あまりにも現実離れしていて初めて見る奴は  
皆、例外なくそういう顔をする」

黒い球体が何かを吐き出す。

男はその黒い塊が吐き出した鈍色に輝くものを取り出し近づいてく  
る。

「んーこり辺じやこんなのはしかないか」

出刃包丁を取り出して。

「まじかよ……」

馬鹿げている、なんでこんな事に巻き込まれてているんだ？  
昨日まで普通に過ごしていた、ただの高校生でしかない俺が何故こ  
んな目にあつてるんだ？

男は目の前で止まり、大きく振りかぶる。  
汚れ一つのない包丁が目の前に迫つて

「翔生！」

その声と同時に男の腰にタックルをして突き飛ばす。

「ぐつ！？」

「ぐつちー！」

少女の声のする方へ態勢を立て直して走る。  
無意識に手を取つて

手を

手が触れた。

#

#

L

思考が記号化する。

急二回頭が熱くなつた

急に目頭が熱くなり、涙が止まらない。

頭痛は一瞬で、頭の中へ制御できない程の情報量が流れ込んでくる。見たことのない風景、知らない人、学校で習った歴史。

その中には白い髪の女の子がいた

少女は一人

いた。

その姿を見て、救われないと想ひ、でしあつた。  
救いたいと願つてしまつた。

身体が熱い。

意識が房に後ろを振り返ると  
男は倒れたまま

した。

翔生はピンク一色に染まる部屋を飛び出した。

「お前……」

「よろしくね、翔生。私はワールドエンド、貴方は世界を繋ぐ者」「それはもう聞いたよ。…………」

何をそんなに満足なのか、謎の美少女は満面の笑みで俺の手を握った。

「それはもう聞いたよ……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9669z/>

---

ワールドエンドによろしく！

2011年12月31日17時52分発行